

社会の諸相を「進んだもの」と「遅れたもの」、「近代的なもの」と「前近代的なもの」といったふうに二分し、歴史は後者から前者へと向かって「進歩」するものだと思わず思考から人間は容易に自由にならないようだ。ヘーゲルの歴史哲学やその後継たるマルキシズムといった欧州に淵源をもつ思想が日本でも大きな思潮となった時代がある。私の青春期には社会主義や共産主義が何か進歩的な思想であるかのように受け入れられていた。

アメリカこそ進歩思想の国である。フランシス・フクヤマの『歴史の終わり(上・下)』(三笠書房)は、冷戦崩壊とは自由民主主義

読書術 半歩遅れの



渡辺 利夫

の最終的な勝利であり、歴史の進歩の到達点を示すものだという。

異なる見方を示すのが、比較文明学者の梅棹忠夫である。梅棹は高度の文明国となったのは西欧の数カ国と日本(第一地域)のみであり、ロシア、中国、インド、イスラム諸国(第二地域)との間には大きな発展格差があるとみる。この格

梅棹忠夫の歴史観

生態学から考える文明の進化

差を生態学の観点から説明するのが『文明の生態史観』(中央公論新社)である。生態学で「遷移」(サクセッション)とは、特定の生態の中で生まれたある植物群落が長期をかけて次第に別種の群落へ変化していく過程をさす。この概念を用いて梅棹は次のようにいう。

「第一地域というのは、ちゃんとサクセッションが順序よく進化した地域である。そういうところでは、歴史は、主として、共同体の内部からの力による展開として理解することができるといわれるオートジェニック(自成的)なサクセッ

ションである。それに対して、第二地域では、歴史はむしろ共同体の外部からの力によって起こされることとおおい。サクセッションといえは、それはアロジエニック(他成的)なサクセッションである」

すべての社会が同一方向へと進歩することなどな

い。歴史とは文明の生態によって別々に紡がれるものだからである。さらに梅棹は次のような驚くべきことをいう。「第二地域は、もともと、巨大な帝国とその衛星国という構成をもった地域である。帝国はつづれば、その帝国をささ

えていた共同体は、全部健在である。内部が充実してきた場合、それらの共同体がそれぞれ自己拡張運動をおこなうとは、だれがいうだろうか」

この拡張運動を梅棹は「中央アジア的暴力」だといふ。中国は騎馬民族や遊牧民族との混淆を繰り返して現代に至る。

中国が今後どのような存在となるのか。日本の将来を左右する重大な関心事である。梅棹の思索を掘り下げればそこから得られる示唆にはきわめて深いものがある。梅棹思想が強い影響力を発揮するのはむしろ今後ではないかという予感が私にはある。(経済学者)